



TITLE:

理学療法部における理学療法専攻 教官との関わり (臨床活動報告3)

AUTHOR(S):

大畑, 光司

CITATION:

大畑, 光司. 理学療法部における理学療法専攻教官との関わり (臨床活動報告3). 京都大学医学部保健学科紀要: 健康科学 2006, 2: 55-56

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/39576>

RIGHT:

理学療法部における理学療法専攻教官の関わり

大 畑 光 司

医学部保健学教員と医学部附属病院理学療法部のスタッフは、臨床、教育、研究などの多方面にわたる密接な協力体制を築いている。この報告では特に理学療法専攻教官と大学病院理学療法士スタッフの協力体制の現状とその目的および今後の方向性について報告する。

臨床業務における協力体制

医学部保健学科理学療法専攻教員はその専門分野に応じて患者を担当する。平成17年11月現在では、理学療法専攻教員の担当は整形外科・スポーツリハ、呼吸理学療法、小児中枢系理学療法の三領域が中心である。それぞれ入院、外来は領域により異なり、整形外科・スポーツリハは入院、外来ともに担当するが、呼吸理学療法は入院が中心、小児中枢系の理学療法は外来となっている。平成17年上半期（平成17年4月～9月まで）の担当患者数は図1の通りであり、理学療法専攻教員が直接担当する患者数だけでもかなりの数となっているうえに、その件数は増加傾向を示している。また、図2はそれぞれの専門領域ごとのべ患者数を示している。専門領域ごとに入院・外来の形態は異なるが、それぞれの領域も高いニーズがあることがわかる。理学療法専攻教員の治療従事は、通常のエデュ・研究業務と並行して行われている。現在のように患者数が増加傾向をたどっていることを考えると、理

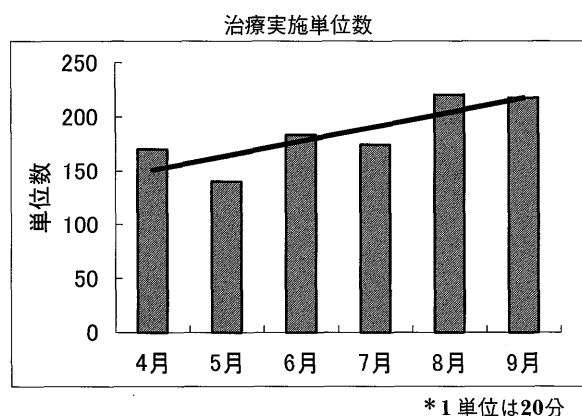


図1 理学療法専攻教員の治療実施単位数

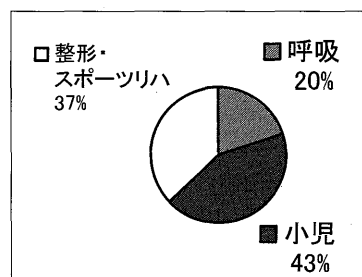


図2 専門領域別のべ患者数の割合

学療法部内のスタッフとのより密接な連携が必要になることが推察される。

理学療法専攻教員と理学療法部の理学療法士スタッフはお互いの専門性を高め、より高度の理学療法を提供する目的で、それぞれの専門班を組織している。専門班は整形外科班、呼吸理学療法班、中枢神経班に分かれ、それぞれを専門とする教員と班内での活動を行っている。班での活動内容はそれぞれ異なるが、評価、治療内容の検討や症例検討を通じて、班員の専門性を高める努力がなされている。現時点ではスタッフの人数が少ないため、活動には制限があるが、将来的には新卒の理学療法士の育成や大学院生の臨床指導、研修生の指導などに、このような活動を役立てることが可能であると考えられる。

教育業務における協力体制

教育業務における京大病院理学療法士スタッフとの連携も密接に行われている。特に他施設に臨床実習を開始する前に、総合評価実習として、専門教員と病院スタッフにより、評価、治療プログラムの立案などについての指導を受ける。また、特に問題のある学生や留年などの理由により特に指導が必要な学生などには、理学療法部内の見学、指導などにより、事前準備を行わせることもある。また複数施設の臨床実習において、学生に対する評価が分かれた場合、最終的な実習到達度を評価するために京大病院内で再実習を課すこともある。京大病院での実習態度を理学療法専攻教官と病院スタッフが評価することで、より適格な指導を行うことができている。将来的に、臨床に根ざした大学院教育を行ううえでは、このような協力体制の更なる発展は必要不可欠であると考えられる。

しかし、将来的に教育業務における更なる協力体制を組むためにも、現時点では理学療法教員、理学療法

部スタッフともマンパワーが不足していることは否めない。このような問題を解決することは今後の課題であると考ええる。

今 後 の 展 望

今後、数年間のうちに、医学部保健学科、附属病院理学療法部ともに大きな変化が求められる。特に医学

部保健学科は大学院教育の開始に向けた準備が必要になる。特に臨床に特化した大学院を目指す場合、附属病院との密接な関係が必須である。しかし現時点で行われている理学療法教員と附属病院スタッフとの協力関係は職務的なものではない。今後、どのような協力体制やシステムを築いていくかは、重要な課題であると考ええる。